

まちとしよ

～大石田町立図書館 information～



Web OPAC
PC・スマホ版

- ◆ ☎35-3877 ◆ 公式HP <http://niji.town.oishida.yamagata.jp/library>
- ◆ 大石田町立図書館蔵書検索システム(WebOPAC)から蔵書の検索や貸出状況、新着情報の確認などができます。利用者登録をしている方は、貸出中の図書を予約することができます。詳しくは図書館にご確認ください。

- 開館時間 午前9時～午後7時(日曜日・祝日は午前9時～午後5時)
- 休館日 毎週木曜日(祝日の場合翌日)、特別整理期間等 《2月の休館日》5日休、12日休、19日休、26日休

図書館講座

「春から活かそう！ 野菜づくりのコツとワザ」

日時 令和8年2月28日(土)
14:00～15:30

場所 町民交流センター「虹のプラザ」
2階 中会議室

講師 (一社)農山漁村文化協会
東北支部 櫻井 歓太郎氏

お申込・お問い合わせ 大石田町立図書館
TEL: 0237-35-3877

参加無料
定員30名



参加費
無料

町子ども読書活動推進委員会講演会 本と教育の力

震災から15年の「読書の町」大熊町から学ぶ

震災以前からの「読書の町おおくま」の取り組みや、全国的にも注目される「学び舎ゆめの森」の概要などお話いただきます。

日時 2/17 火 14:00～15:00

場所 虹のプラザ 2階中会議室
(zoomによるリモート講演)

講師 福島県大熊町教育委員会生涯学習課
課長補佐兼社会教育係長 風間 真由美氏

申込 大石田町立図書館 TEL 35-3877

今月は、どの本を読む？

新着本から話題の本・おすすめ本を紹介します！



『かずをはぐくむ』

(森田 真生//著、西 淑//絵 福音館書店)

やがて、子どもの心の中には数が“生まれ”、おとなと共に“育み”あうようになる。3歳と0歳のきょうだいが、8歳と5歳になるまでの驚きに満ちた日々を、やわらかに綴る。『母の友』連載を書籍化。



『乱歩と千畝RAMPOとSEMPO』

(青柳 碧人//著 新潮社)

巨匠・江戸川乱歩と、ユダヤ人を救った外交官・杉原千畝。まだ何者でもなかったふたりは希望と不安を抱え、浅草の狼狽な路地を歩き語り合い…。斬新な発想で描く波瀾万丈の物語。『yomyom』連載を単行本化。

『消えたモナ・リザ』

(ニコラス・デイ//作、千葉 茂樹//訳 小学館)

世界一有名な名画「モナ・リザ」は、1911年の盗難事件で注目されるまでは無名の作品にすぎなかった。パリ警視庁の捜査とルーブル美術館に戻るまでの経緯、作者レオナルド・ダ・ヴィンチの人生を描いたノンフィクション。



『なぎちゃんが なんでにんじんのこしたか』

(ネコリ・ハコリ//作 絵本館)

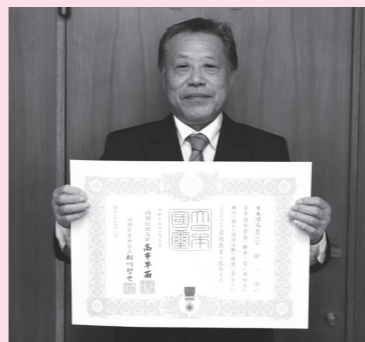
「なぎちゃん、またにんじんのこしてるやん」幼稚園からかえってきた、なぎちゃん。お母さんにそう言われて、どうしておべんとうのにんじんをのこしたのか、そのわけをはなしはじめ…。大阪弁が小気味良い楽しい絵本。



※書影は各出版社HPまたは規定する方法から、紹介文は「TRC MARC」より引用しています。すべて町立図書館蔵書。

消防活動に尽力された 2名に叙勲・褒章が授与されました

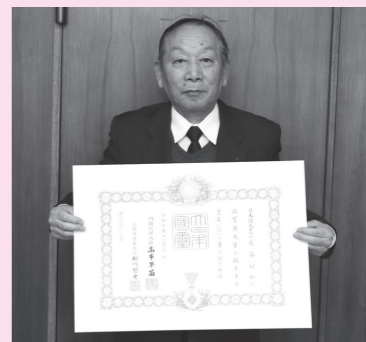
大変おめでとうございます。



「藍綬褒章」

富樫 一也さん(佐田町)に

町消防団分団長の富樫一也さん(佐田町)に「藍綬褒章」が授与されました。富樫さんは令和3年から町消防団分団長として災害発生時の指揮や日頃の予防消防にあたられるなど町消防団の充実、強化に尽力されました。褒章はこれらの功績が認められたものです。大変おめでとうございます。



「瑞宝単光章」

遠藤好和さん(仲通)に

「瑞宝単光章」が授与されました。遠藤さんは昭和51年から46年の長きにわたり、町消防団員を務められ、その間、副団長などを歴任し、災害現場での団員の指揮と予防消防に尽力されて町消防団発展に多大な貢献をされました。叙勲はこれらの功績が認められたものです。大変おめでとうございます。

町長コラム

「次世代へ虹をかける」

『そばで、世界につながる』

vol.25

皆さん、明けましておめでとうございます。NHKの「クロージング」でも取り上げられました。難しく聞こえるかもしれませんが、決して特別なものではなく、私たちが日々大切に生きてきた当たり前の暮らしそのものだと思います。その視点で見ると、大石田町の蕎麦には、この町の暮らしや人の思いが自然とじんじんでいっているように感じます。昔から客人を迎える際に時間と手間を惜しまず心を込めて蕎麦を打つ。その「おもてなし」が、人と人をつなぎ、この町の文化として受け継がれてきました。

蕎麦を打ち、人を迎え、語らう。その日常の中に大石田町らしさがあります。大石田の蕎麦を食べる日本各地、そして世界中から足を運んでくださる方が増えていく。「大石田の蕎麦を食べにこう!!」「大石田の蕎麦食ってきたよ!!」と世界のどこかで語られるような町になれば素敵ですね。

最近「日本人の9割は知らない世界の富裕層は日本を何を食べているか(ダイヤモンド社)」という本を読みました。サブタイトルにはこう書いています。「今、ほんとうの贅沢は「地方」にある」と。東京や大都市圏で高級な料理や有名店よりも、その土地で長く受け継がれてきた食文化、そこでは味わえないものを楽しまたいという方が増えているそうです。

料理の味だけでなく、食材が育つ風土や歴史、人の手仕事や思いまで含めて味わう考え方を「ガストロノミー」と呼びます。NHKの「クロージング」でも取り上げられました。難しく聞こえるかもしれませんが、決して特別なものではなく、私たちが日々大切に生きてきた当たり前の暮らしそのものだと思います。その視点で見ると、大石田町の蕎麦には、この町の暮らしや人の思いが自然とじんじんでいっているように感じます。昔から客人を迎える際に時間と手間を惜しまず心を込めて蕎麦を打つ。その「おもてなし」が、人と人をつなぎ、この町の文化として受け継がれてきました。

大石田町長 庄司 中

